わが社の★イチバン The One and Only

食品ラップ用紙筒や繊維・フィルムの巻き芯、建材用円筒容器など、紙管、樹脂製品の製造・販売を手がける昭和丸筒。製品のなかには、それぞれの分野でトップシェアを誇り、われわれが普段の生活で目にするものも多い。創業以来受け継いできた創意工夫の精神と独自技術で、競争力のある製品を世に送り出している。

世の中に不可欠な製品を提供し多くの産業分野に貢献

昭和丸筒

●本社：大阪府東大阪市●創業：1923年●売上高：約140億円（グループ連結、2019年5月期）●従業員数：464人（グループ連結）●銀行取引店：三菱UFJ銀行中之島支店

創業以来の技術、多彩な製品を集めたショールーム兼歴史資料館「昭和ミュージアム」にて。手前は、「セルロースナノファイバー」を用いてつくられた自転車（中央が湯浅祥弘社長）

1923年、昭和丸筒（まるつつ）の前身である「佐藤紙器工業所」を設立したのは佐藤秀雄氏だ。主として電気業界に販路を求め、乾電池の外装用の手巻き筒を生産し事業規模を拡大する。

創業者はアイデアマンだった。たとえば昭和初期に発売した「国旗入れの筒」。紙の筒は回転式で、使った後、目盛りを1つ進めておくと、次に国旗を掲揚する祝日が表示される仕組みだった。いまでいうリマインダー機能を搭載しており、特許も取得し、よく売れたという。

戦後になって繊維業界向けに進出。糸を巻くための紙ボビンを開発すると、これが大ヒットする。当時、伸びていた化学繊維用で、強度をはじめ他社製品との性能優位性が認められ、受注が拡大した。

その後、建設や物流業界向けなど事業領域も広がり、現在は多種多様な製品を擁する総合パッケージメーカーに成長している。われわれが普段目にする食品ラップ用の紙筒、ポテトチップスなどの菓子のパッケージに使われる円筒容器をはじめ、トップシェアの製品も多い。

現在、昭和丸筒の経営トップを務めるのは、湯浅祥弘社長。京都大学工学部を卒業後、松下電器産業（現パナソニック）に入社、パナソニック北米本社上席副社長やヘルスケア北米社社長などの要職を歴任後、創業家に期待されて昭和丸筒に移籍、2015年、社長に就任した。

4年後に創業100年を迎える昭和丸筒。長い歴史のなかで特筆すべき出来事を聞くと、湯浅社長は「1955年に紙管の研究室を設立したこと」と答えた。当時、町工場のような企業に、大企業並みの研究に特化した部署を設け、専任者を配置するのはきわめて珍しいことだったのでは、と話す。

夢の新素材「CNF」に挑戦

紙管、巻き芯といった製品で強い支持を得ている昭和丸筒だが、次代に結びつく事業として期待されているのは、CNF（セルロースナノファイバー）製品の実用化。CNFとは、紙の原料となるパルプをナノ単位にまで砕き、再生成したもので、重さは鋼鉄の5分の1と軽いのに、強度は5倍もあるという夢の新素材。日本は森林資源が豊富なため、量産できる可能性がある素材として注目されている。

現在、CNFを使った軽量自動車の実現を目指す、環境省の事業である「NCVプロジェクト」に参画。今年10月に開催される「東京モーターショー」では、昭和丸筒製の部材を搭載した自動車が出品される。ほかにフルートやバットなどを試作したこともあり、今後、CNFを加工した意外な製品が登場するかもしれない。

また昨年6月には、精密な画像検査機の製造・販売事業をスタートさせた。自社で販売する、医療向け樹脂製品の検品を行う設備だ。40年以上、従業員が目視で検査を行っていたが、機械による自動化に成功、不良品流出ゼロを実現した。それまで不可能とされ、いわば業界の常識を覆した画期的な製品である。自社で使用するだけでなく、各業種にカスタマイズした製品を外販したところ、医薬品や食品をはじめいろいろな業界から引き合いが増えており、同社では手応えを得ている。

独自技術と創意工夫でユニークな製品を世に送り出してきた昭和丸筒。主力製品にとらわれず新たなニーズにも挑む、進取果敢の精神が同社のイチバンの強みと言えそうだ。

1930年ごろにつくられていた乾電池の外装用の手巻き筒と電池の紙箱

農林省（当時）の指定工場として、有害鳥獣を駆除するための猟銃に使う紙管製薬莢も生産していた（1948年ごろ）

 取材・文◉森本守人　撮影◉金原 誠